

明石の史跡（14）戎町吉右衛門の妻



享保12年（1727）5月4日、郡代所より御触れがだされた。それによれば、明石城下の戎町に住む、猟師の吉右衛門の妻（名は不詳）は、ここ数年来、舅姑に孝行なる様子が上聞に達し、奇特（心がけや行いがすぐれてほめるべきものであること＝広辞苑）なことであるとして表彰の対象となり、米2俵が下されたことを、安福家2代目の源右衛門令茂（はるしげ＝三木郡小川組大庄屋）は、記録している（累年覚書集要）。

戎町（現在の材木町・港町）というのは、宝永6年（1709）以前に町名が見られた船町から、享保2年（1717）に分離独立したものである。町の規模は、同6年（1721）改によれば、家数192軒（本家71・借家121）で人口は951人である（兵庫県地名Ⅱ）。安福令茂は、被表彰者が「りょうし」の妻であると聞き、吉右衛門の生業を猟師と記したのが誤りであることは、当地が古くから漁師町であることを想起すれば、理解できよう。

吉右衛門の妻が、舅姑にたいしてどのような孝養をつくしたのかは不明というしかない。しかし寛政3年（1791）、美作国東南条郡高野本郷村の百姓彦次郎の妻が、病身の姑の看病につくし、野辺の送りをすませたまでは問題なかった。ところがのこされた舅に対しては、逼迫した家計ではなかったにもかかわらず、舅の出費（具体的な内容は不明）について種々歎いたため（舅の介護は、心身ともに大きな負担であったろうことは推察される）、離縁されてしまった（菅野則子著『江戸時代の孝行者』）。

上記の一件をさかのぼる64年前、吉右衛門の妻が表彰されたということは、舅姑にたいする孝行が、今日的なものになりつつあることを、示唆しているにも思われる。